日本航空株式会社所属ボーイング式７６７－３００型ＪＡ６０３Ｊの航空事故調査について
（経過報告）

令和５年２月１６日
運輸安全委員会（航空部会）

運輸安全委員会は、令和４年３月２６日、名古屋飛行場の東約９０㎞、高度約８,５００ｍにおいて、日本航空株式会社所属ボーイング式７６７－３００型ＪＡ６０３Ｊが飛行中に動揺し、客室乗務員１名が負傷した航空事故について、令和４年３月から原因を究明するための調査を進めてきたところであるが、これまでの調査で得られた情報をもとに、さらに分析を進めるとともに、原因関係者からの意見聴取及び関係国への意見照会を行う必要がある。このため、本件調査については、本航空事故が発生した日から１年以内に調査を終えることが困難であると見込まれる状況にあることから、運輸安全委員会設置法第２５条第４項の規定に基づき、以下のとおり当該調査の経過を報告する。

なお、本経過報告の内容については、今後、新たな情報の入手等により、修正されることがあり得る。

また、本調査は、本航空事故に関し、運輸安全委員会設置法及び国際民間航空条約第１３附属書に従い、航空事故及び事故に伴い発生した被害の原因を究明し、事故等の防止及び被害の軽減に寄与することを目的として行うものであり、本航空事故の責任を問うために行うものではない。

１．航空事故の概要

日本航空株式会社所属ボーイング式７６７－３００型ＪＡ６０３Ｊは、令和４年３月２６日（土）、東京国際空港を離陸し、大分空港に向けて飛行中、機体が動揺し、客室乗務員１名が負傷した。

２．調査の概要

運輸安全委員会は、令和４年３月２８日、航空事故として通報を受け、本航空事故の調査を担当する主管調査官ほか１名の航空事故調査官を指名した。現時点までに関係者からの口述聴取、航空機及び気象の調査、飛行記録装置等の記録の解析等を実施した。

３．判明している主な事実情報

（１）飛行の経過

当該機は、令和４年３月２６日、機長ほか乗務員７名、乗客６２名、計７０名が搭乗し、同社の定期６６９便として東京国際空港を離陸した。

同機は、名古屋飛行場の東約９０㎞、高度約８,５００ｍで巡航中、１７時３５分ごろ、「ドン」と下に下がる急な動揺が発生した。

図１　推定飛行経路

この時、垂直加速度は、１.０Ｇ付近から１.２８Ｇに変化し、その直後に－０.０２Ｇへとマイナス側へ大きく変化していた。また、この変化は約２秒間と短時間であった。

負傷した客室乗務員Ａは、機内サービスを終えて、もう１名の客室乗務員と共に後部ギャレーでカート等を収納中にこの動揺に遭遇した。その際、２名とも体が宙に浮いた後にしりもちをついたが、２名に痛みはなかったため業務を継続した（図２参照）。

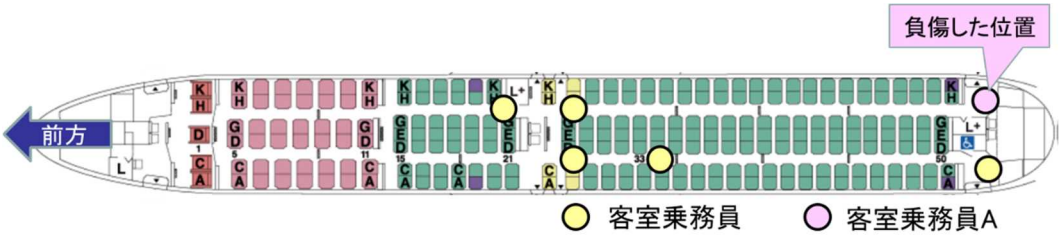

図２　事故発生時の客室の状況

客室乗務員Ａは、帰宅後、少しずつ足が動かなくなってきたため、医療機関で受診したところ仙骨骨折と診断された。

（２）死傷者

客室乗務員１名　重傷（仙骨骨折）

（３）航空機の損壊

なし

（４）気象

事故当日、日本海及び四国付近の上空には前線を伴った二つの低気圧があり、同機の飛行経路付近は、高い高度帯で晴天乱気流が、低い高度帯では低気圧に伴う乱気流が、国内悪天解析図に解析されていた。

本航空事故発生前の巡航中は、薄い雲の中であったが、機上気象レーダーには針路上に強いエコーはなかった。

４．今後の調査

本航空事故の原因及び本航空事故に伴い発生した被害の原因の究明並びに事故の再発防止策の検討のため、これまでの調査で得られた情報をもとに、飛行中に揺れに至った状況の詳細など、更なる分析のほか、原因関係者からの意見聴取及び関係国への意見照会を行う必要がある。

本委員会は、これまでの調査、分析等によって得られた結果を踏まえて、引き続き本航空事故の原因等の調査を進める。